

ONE'S
voice

野田 秀樹 × アイタイヒト

THE BEE 欧州ツアー
2014を終わって

ロンドンでの稽古を経て、パリ国立シャイヨー劇場、ルクセンブルグ、ドイツとヨーロッパ3か国を巡った2014年の『THE BEE』ツアー。野田作品に参加した俳優たち、そして初めて英語で「井戸」役に挑戦した野田秀樹が、ツアー最終地のドイツで語り合った。



パリ国立シャイヨー劇場 玄関

「THE BEE」English Version ヨーロッパツアー 2014

パリ・国立シャイヨー劇場 フランス初演

photo:naoko tamura

左から、デヴィッド、ペトラ、野田、グリーン

Photo: Marc Wollmann

野田秀樹 × グリン・プリチャード & デヴィッド・チャールズ & ペトラ・マッシー

成熟したヨーロッパの観客の反応

編集部 まず初めに今回の欧州ツアー全体の印象について伺います。

ペトラ 素晴らしいツアーよ!

グリーン とても有意義なツアーだよ。ドイツ人の観客は、公演中に声を出しては反応しないということがはっきりわかった。(笑)ドイツとルクセンブルグは反応が似ているように感じた。一方、パリでは、あらゆる面で様々な反応が入り交じっていた。観客による作品の受け止め方は、会場条件にも作用されていたかもね。

デヴィッド パリで面白かった点は、僕たち役者にとっては(会場が仮設であったことなど)他会場より困難

な条件であったにも関わらず、観客がとても深く作品を理解してくれた点だね。作品を本当の意味で理解し、そして満足してくれたと感じた。

野田 パリでは冒頭シーンの演出を変えた。(仮設会場の立地を生かし)開場時にエッフェル塔や外の景観が見えるように意図的にカーテンを開けておき、その後突然カーテンを閉めて劇をはじめるといった演出を取り入れてみた。日常の時間が突然変化したので、パリの観客も驚き、そしてすぐに物語に入り込ん

でいった。それこそが演劇のマジックなのかなと思う。

デヴィッド 確かに。観客からすると意外性のある“はじまり”だったね。その演出効果で、劇が良い意味で強い衝撃となっていった。

野田 他にもいくつかの要因があった。たとえば、舞台と客席が同じ高さに設定されていて、緊密な空間だったしね。ロンドンのソーホー劇場同様、今回のパリ公演も客席の勾配が急で、そのため観客は舞台床面全体を見おろすことができた。この作品にはその方がよりふさわしいのかも知れない。

デヴィッド 紙でできたセットの全体像が見えるから?

野田 うん。舞台美術として、紙がたくさん使われていることあって、観客から(紙の)奥の壁しか見えないより、床全体も見えた方がより効果的だとは思う。

グリーン & デヴィッド 確かに。

野田 今回、3つの都市で上演し、そこでの観客の様々な反応に出会い、あらためて、ヨーロッパの観客は総じてとても成熟していると強く感じた。日本では、観客同士がお互いの反応を気にするとか、見合う傾向があるような気がするけど、こちらでは、各々が確たる個人として反応してくると感じた。

初参加した俳優たち、そしてリハーサルの過程

編集部 ペトラとデヴィッドは今回が作品への初参加でしたが、いかがでしたか?

ペトラ そう、私たちは『THE BEE』の新人です。

グリーン 新しいハチたち。

デヴィッド 巡業中の新入りのハチです。(笑)そうですね...正直に言うと、自分が以前演じたことのないような役を演じるのはとても新鮮でした。いつもとは違う演技の仕方を試せる雰囲気、制約があるとは感じなかった。あえて例えるなら、ジャズでもよくあるコード進行のような感じで、いったんそれを覚えたら、そのコード進行から外れてみたり、また元に戻ってみたり、そんな自由がありました。

ペトラ 私の場合は、特に台詞覚えが遅いので、稽古期間が比較的短かったことや、すでに何度も上演された作品をやるということも重なって、台本を読み込むという事前準備作業が大変だったわ。思うに、稽古が始まる前に台本を覚えるのは必ずしも良いこととは限らない。もちろん、事前に台詞を覚えることは、たたき台にはなるけれど、動きながら台詞を覚えることは分けて考えなくてはならないから。でも稽古のプロセス自体はとても満足いくものだった。確か一週目にはもう通し

稽古をしたのよね?

デヴィッド 確かに...しかも急に!(笑)

グリーン 成り行きでそうなったのだった?

ペトラ そうよ!デヴィッドが急に立ち稽古を始めたのよ!

グリーン よくありがちな?(笑)

デヴィッド いつの間にか止まらなくなったんだ。(笑)

ペトラ でも、実はそれが快感だったの!(笑)始める前は、こんな短い稽古期間で間に合うのかしら、ととても心配していたから。少なくとも5、6回は通し稽古をしたわよね?私たち。

野田 たまたま通ってしまった分も含めてね。(笑)

ペトラ そういえば、野田さんは、時に大胆に台詞を変えることがあるわよね?

野田 うん。それはそれで良いのではないかな。書いた脚本や台詞を変えることを許さない劇

作家もたくさんいるけど、僕はたまに変えたりもする。シェイクスピアだったら、台詞を大胆に変えることはむずかしいのだけど...。(笑)

グリーン 確かに...。でも現代劇の劇作家たちはもっと柔軟であるべきだと?

野田 はい。

グリーン 大賛成。作家はもっと柔軟であるべきだと思う。

ペトラ 書かれた言葉はもちろん尊重されなければならない。ただ、その言葉、つまりは台詞に俳優が息吹を与え“生きたものにする”とい

う作業がある。それを阻止して息吹を与えなかったら、肝心の中身が死んでしまうと思う。

野田 『THE BEE』は即興劇ではない。ただ、上演している時の感覚としては、毎日のように何かを即興的にやっている感覚がある。

デヴィッド まるで作品が生きているみたいな感覚だね。その感覚は、僕たちひとりひとりが舞台上に立っている時に、やり方を固定していない点とも共通していると思う。自由に演じなくてはならない部分が常にあるのだと思う。

野田作品の特徴とは?

デヴィッド 野田さんの作品は、基本的に作品全体がユーモアのセンスで支えられている。単なる深刻さではなく、細部にわたって人間らしさがこめられていて、実在を体感することができる。それこそが野田作品の特徴であり、だから野田さんの作品に出演するのが大好きなんだ。自分自身もそういった感覚で人生を生きたいから。

グリーン 同感。たまた『THE BEE』のようなシリアスな内容であったとしても、観客は必ずしもユーモアの感覚を遮断してしまうようなネガティブな気持ちで観に来るわけではない。

ペトラ でも同時に観客は人の心の闇の部分に導かれ、そうした心の動きによって芝居の迫力やシリアスさがよりいっそう増していくこともある...私が最も好きなダーク・コメディの構造。

グリーン ブラック・ユーモアがある。

ペトラ 子供の頃からあった、飽きのこない、本来なら笑ってはいけないことに対して笑ってしまうといった類いのユーモアだと思う。野田さんはそうしたことを土台に、魔法の粉を使って表現している。いつか、野田さんとぜひ一緒に道化芝居をやりたいわ。昨日、野田さんが閉まったドアに突っ込んで行くのを見てしまったので、尚更。(笑)



HIDEKI NODA

構成・文・編集部
Photo: Marc Wollmann 翻訳:角田美千代

今回のアイタイヒト

GLYN PRITCHARD

グリン・プリチャード
俳優。

DAVID CHARLES

デヴィッド・チャールズ
俳優。

PETRA MASSEY

ペトラ・マッシー
俳優。

野田秀樹

劇作家、演出家、役者。
2009年より東京芸術劇場芸術監督。

NODA・MAP第19回公演「エッグ」 詳細は劇場HP(www.geigeki.jp)へ
東京公演:2015年2月3日(火)~2月22日(日) ※2月9日、2月16日は休演 会場:プレイハウス
作・演出:野田秀樹 音楽:椎名林檎
出演:妻夫木聡 深津絵里 仲村トオル 秋山菜津子 大倉孝二 藤井隆 野田秀樹 橋爪功
※パリの国立シャイヨー劇場正式招待公演 3月3日(火)~3月8日

チケット一般発売12月13日(土)

東京公演チケット取扱い |
東京芸術劇場ボックスオフィス
0570-010-296 (休館日を除く10:00~19:00)